

〈鞍馬天狗〉「花の下・月の前」

—安居院澄憲の名句から—

田口和夫

花盛りの鞍馬山西谷、稚児たちの賑やかな花見の場に山伏が現れる。それを嫌った稚児一行が去って、舞台には稚児と山伏の二人が残される。「花見には貴賤親疎を問わないものなのに」と嘆く山伏に、稚児が声を掛ける。一番の「開聞」のところである。

げにや花の下の半日の客、月の前の一夜の友。それさへ誼はあるものを、あら痛はしや近う寄りて花御覽候へ。

思いもよらぬ稚児の「半日・一夜という短い時間でも、親しい交わりはあるものです」という言葉に、山伏は稚児に心を寄せることになる。

この「花の下の半日の客、月の前の一夜の友」という対句について、諸注は一致して「平家物語」卷三「少将都帰」に見えるとす。鬼界が島に流されていた丹波の少将成経・平判官入道康頼が都へ戻った場面である。「花の

下の半日の客、月の前の一夜の友、旅人が一村雨の過行くに、一樹の陰に立寄って、わかる余波も惜しきぞかし。況んや是は憂かりし嶋の住ひ、船のうち浪のうへ」と描写される。友と共にある「短い間」を強調する趣旨は、〈鞍馬天狗〉の稚児の言葉と同じである。〈鞍馬天狗〉の解釈としては、平家物語を引けば、一応納得が行くことになる。ただし、平家物語諸注は、類似表現として十訓抄五、宝物集などを挙げるものの、この対句については「出典があるが未詳」（全集）としている。本稿ではまず、その出典について考える。

安居院澄憲の説法

古典文庫『澄憲作文大鉢』に収められた畑中栄氏の「解題四、澄憲伝」を詠んでいたところ、安居院流唱導の祖、澄憲の説法が引かれ、その一節に次のようであった。

花の下の半日の客すらも、猶別れを夕べの

風に怨むべし。月の前の一夜の友は、散りぬることを暁の雲に惜しむらん。一夜の会合も、一度も隔つだにもいかがは候ひなむ。松の門に軒を構へて朝暮見馴ひ候けむ人、いか許かは思しめし合ひたらむ。

これが名句の源流である。私に解すれば「共に花の下で半日を過ごした客でさえ、稚児との別れを夕風に怨み、月の前で一夜の友となった人も、稚児の死を暁雲に惜しむのだ」となるうか。この名句が吐かれたのは「未だ凡僧であった澄憲が三十六歳の応保元年（一一六一）八月十七日、比叡山の衆徒を挙げて造仏写経の上、五部大乘経供養した説法」（澄憲伝）の場であった。この法会のこと源平盛衰記卷三「澄憲祈雨」に見える。比叡山の稚児が琵琶湖に入水自殺し、それを供養する法会であり、導師が澄憲である。盛衰記は、説法施主段の「髪・神」の秀句に感動した衆徒が澄憲を「僧綱に准じて、手輿にのせ」たとするが、この結末は納得のいかないものであった。この程度の秀句で衆徒が「感涙を流す」筈が無いからである。果然、畑中氏が引用される説法の全体は、澄憲が見事な文辞を以て、衆徒たちを感動させたことを明らかにしている。澄憲草案集・澄憲作文集によるその詳細は、畑中氏に詳しい。澄憲は法会の意義を説いた後で、この法会の功德に依って稚児の離苦得楽は疑い無いが、恋慕悲嘆の情は尽

くしがたいとして、残された者の思いを述べる。「花の下」の名句はその冒頭を飾っているのである。ここで注目しておきたいのは、平家物語や十訓抄の引用の中では、「友」との僅かな時間の出会いや別れに関して、この名句が引かれているのだが、澄憲の説法では「稚児」に関わるものだったという事である。〈鞍馬天狗〉においても、稚児と大天狗との恋心が存在する中での名句である。そういう点では平家物語よりも、この説法の方が能に近いと云えるのである。

名説法の分流

この名説法は安居院流唱導の中で語り継がれていた筈である。その流れのひとつが〈鞍馬天狗〉であった。もう一つの流れは盛衰記も引いた「稚児入水自殺」である。能の中にも同じテーマを持つものがある。説法では稚児は法会によって極楽往生を遂げるのだが、能では、超越的存在の力によって稚児が蘇生することになる。〈熊野参(兼元)〉がその典型的な例である。小田幸子氏「生贄」と「熊野参」―その源流―(「能研究と評論」8、昭54・10)に「護法型泣キ猿楽」についての論がある。

泉州槇尾寺の稚児花若は師僧に追放され、池に身を投げて死ぬ。花若の父兼元夫婦が熊野参詣のついでに立ち寄り、花若の死骸に対面し嘆く。熊野山伏が蘇生を祈ると、護法善神が現れて花若を蘇生させる。

稚児入水だけならば(丹後物狂)があるが、護法型にならない。入水ではない稚児の死と蘇生の典型には(谷行)があり、伎楽鬼神が蘇生させる。〈鞍馬天狗〉も、この護法による「稚児の死と蘇生」譚の末流となっていると考えるのである。

〈鞍馬天狗〉の稚児と大天狗

牛若である筈の稚児は能の詞章の中では牛若と名乗っていない。前シテ山伏が「さすがにわ上臈は、常磐腹には三男、毘沙門の沙の字をかたどり、おん名をも沙那王殿と付け申す」と云う。古典集成注は、この「付け申す」を、大天狗がこの時に名を付けたと解している。私もそう思う。この言葉までは、能の中では、一人の稚児に過ぎないのである。古典集成頭注が指摘するように、この稚児はみすぼらしい姿であったのかもしれない。そういう稚児に、毘沙門天ではない者、しかも「天狗」が、勝手に「沙」の一字を用いて名を付ける。ここには特別の意味があると考えられる。「今昔物語集」巻二十に描かれる天狗は仏法に敵対しながら、つねに敗れ去る存在である。中世の説話集や天狗草紙に見える天狗も、その属性は同じである。より時代が下れば集成「各曲解題」が引く「常磐物語」や「天狗の内裏」に見える大天狗のように、牛若を庇護し尊ぶものが出て来る。〈鞍馬天狗〉の大天狗は、その段階に近いとは云えよう。大天狗に逢うま

での稚児(牛若)は、平家全盛の時代だから「よろづ面目もなき事どもにて、月にも花にも捨てられて候」と述懐する。絶望の淵に沈み、生きるに値しないと思うような境遇である。そのときに出会った山伏が、軍神毘沙門の沙の字を取って沙那王の名を稚児に与える。この行為は、稚児にとっては死の淵からの蘇生・再生を意味していた。この大天狗が発揮する力は、毘沙門天を代行するものと見える。そう考えるとこの二人は、毘沙門天を信仰する稚児とそれを守護する護法童子に見える。例えば宇治拾遺物語「信濃の国の聖の事」に見える、毘沙門を信仰する命運に使役される「剣の護法」や、今昔物語集巻十二「書写山性空聖人語第三十四」に見える、性空が毘沙門から賜った「十七八歳許ノ童」がそれである。この二話ではいずれも毘沙門天の使童が護法童子となって働く。〈鞍馬天狗〉の大天狗にも、この毘沙門天の使童の面影があると考える。勿論、能(花月)において、少年花月を連れて山々をめぐる天狗と同様の行為ができる天狗ではあるけれども、稚児の蘇生・再生、その後の守護という能(鞍馬天狗)の本筋では、ひたすら沙那王を支える役割に徹しており、それは一般の天狗の概念とは違う側面なのである。大天狗は護法童子でもあったのである。

(文教大学名誉教授)